

足跡をたどる

三条万里子

目次

原風景	6
明治の女 ^{ひと}	8
ヤング・ケアラ	11
一言も云わない……	13
ショパン	14
不安感	16
時の刻み	18
呪文	20
糸の切れた凧	22
限りなくピンク色	24
「建前」と「本音」	26

DANCE	27
両性具有	29
脱皮	30
これが「恋」?	32
日本人	34
人間否定	36
ブーメラン	38
フルブライト資金	39
作品「土偶Ⅱ JOMON」	41
あとがき	44

原風景

みぞれまじりの雪の日、凍てつく土の上を素足にわらじ。薄い衣が風になびく。列になつて歩く禅僧の姿——ふるさと八王子——

一年生「君が代」、二年生「昭和の光」——これが小学生になった私のお正月の書き初めの文字——そのとき第二次世界大戦が始まった。「神国日本」「勝ち抜くぞ」「赤十字傷病兵」「大君の辺にこそ死なめ」……その六年生の夏、敗戦を迎えた。

食物も底をつき、終戦の二週間前、私と妹は母に伴われて近在の五日市町に疎開して命拾いをした。その夜、八王子は街も家々も焼け爛れた。母と姉を気遣い、一睡もしないで翌朝トラツクに乗せてもらい初めての一人旅。

閉ざされた交通のため市街の浅川沿いの堤防を夕方まで歩き、やつと辿り着いた我が家は見る影もなくすべて灰になり、校庭の櫟けやきの大木が幹だけの姿で残っていた。月明かりだけが頼りの焼け跡の小屋で、一家八人の生活が再び始まった。

焼土にめぐってきた春。芽吹く草花や温ぬるんだ小川の水のことなどと、目に触れる心象を習いたての詩、俳句、短歌に―。たった数ヶ月だったが、遂に六年生卒業記念の文集『わか竹』を、鈴木キミコ先生とクラスメイトで作った。赤い紐ひもで綴とじられたガリ板刷りのその本を今でも私はそーっと開く。そして恩師との文通は八十歳まで続いた。

文集の中の私の句―

『草の香や あぜ道を吹く春の風』

『なつかしき 疎開の友の春だより』

明治の女ひと

私がもの心ついた時には、祖母が七十歳半ば、母は三十代で女系家族の一人っ子。日本特有の芸事をいろいろ習わされ、それに反発する一種のモダンガールであつたようだ。父母は学齢期に入つた子供たちのために、八王子市立第四小学校の北側に家を新築した。花道かどうの師匠だつた母は理想の庭造りをし、副業として「ミッキー」という屋号の文房具店を開いた。また、日本のパイオニア石井漠を訪ねて教師を頼み、八王子にモダンダンススタジオを始めた。

新しい息吹をどんどん取り入れる気質旺盛な人だつたが、ドレスとハイヒールは買ったまま箱の中。見るだけでほとんど一生を和服で過ごした人だつた。幼稚園児の私は母と一緒にその箱を開ける度にどんなに胸を轟とどろかせたことだつたらうか！

織物の盛んな八王子は、女性の生活の場として活気に満ち、行儀見習いの若い人がいつも数人同居していた。私たち兄弟との平和で楽しい思い出ばかりがよみがえる。

実のなる梅の木二本に紅梅、柿の木も二本。生花いけばなに使えるような雪やなぎ、小手毬こでまり、紫陽花あじさい、もみじ等々…東側の垣根は南天。北側は銀杏いちょう。門から裏木戸までモダンな四角い飛び石がつづき、植え込みの境はリュウのヒゲで囲われ、その青い実の珠で、私はまりつきをした。ママゴトの材料には事欠かなかった。

その家で、母は祖母と共に、私たち五人兄弟を育てながら第二次世界大戦と敗戦を迎えた。どんなに大変なときでも、終生前向きな二人の姿を見た。しかし子守唄が聴こえると、母は泣く。いつしか私もそれにつられて子守唄はいつ聴いても唄っても、悲しい…。

「士族」「檀家総代」「酒造」「運輸業」「米屋」「倒産」「私生児」「もらわれっ子」「ままはは継母」——このすべてが祖父、祖母、父、母の身に降りかかっていた——という事実を大人になってから知った。森鷗外の『山椒大夫』や『母をたずねて三千里』など、本の話ではない。母は生みの母を生涯探し続け、遂に判らず終い^{しま}だった。人の世でこんな話は繰り返されないことを祈るばかりだ。

「ミツキー」という屋号、モダンダンス。全て母の先見であった。

戦前、書家の先生を家に招き、一家全員の手習いが続いた。心を鎮めるために一人で習字を再開したニューヨークの初期。その後の私を大きく助けた。

幼かったときが絵のように浮かぶ。戦前の追憶が鮮明なのは、私が老いたからであろう。

ヤング・ケアラー

空襲で住む家を失った上に、国債ですべてを失った父母。敗戦後の四年間、花道の教師の道は閉ざされ、武家の商法すべて成り立たず、私たち家族は健闘したが、遂に立ち直れず一家離散した。

体調を崩した父は近在の寺男^{てらおとこ}。母は病院の賄い^{まかな}。少年飛行兵だった兄は写真館の住み込み弟子。私が、明治から続く良妻賢母型の女学校に在学中には、土地も家も手放して近在の村に移った。舞踊家の内弟子^{うちでし}になる予定が崩れた私は老齡の祖母を伴って、洋裁店に勤め始めた姉と、学生だった妹と弟とで農家の離れ家に住む。

主婦の代行とヤング・ケアラー（現在日本で流行語）。妹は夜学に行き、私と昼夜交代した。関東近在にはアメリカ軍の基地があり、夜の通学路で怖い思いをした妹。その妹は出産の折の輸血が晩年に崇り命を落とした。今は姉も兄も父も母も祖母も、みんな既に旅立った。

大人になった姪・甥とその家族は、誰もこんな話は知らない。スイッチひとつで何でも手に入る現代日本の文化生活の凄まじい変貌。それにどつぷりと浸かっている若者には、想像も理解も不可能だ。

一言も云わない…

箆^{かけひ}の水での炊事。小川での洗濯。洗面器一杯のお湯でさえ薪で火を起こし、お風呂は農家のもらい湯。食料も衣類も医療も全く足りていなかった。しかし当時の日本では、多くの引揚者家族は離散し、命からがらの帰国。私たちは国内に居ただけでも、どれほど幸せだったか。

私たちの生活は、その後何年か続く。私にとってはその時の体験は大変に大きなもので、生きるための基礎にすらなっていた…と、今思う。しかし、あの凄まじい困難の最中に死を迎えた祖母のすごさ。人の精神性の最も上質なものをあの時私は目にした。決して忘れられない！「繰言—文句、苦情^{コンプレイン}」と「言い訳^{エクスキューズ}」を一言も云わなかった！

それを胸に—私はもう少し、生きる。

シヨパン

自分という生身なまみの体。十―二十歳の頃がどんなに大切な時期だったか…。それより前の夢心地のような幼児体験も、もっと大切だったことと思う。

母に夢を託されて三歳で始めた「舞踊」は、自分の芽生えも手伝い、迷いながらもそのとき止めた。自分の体が疎ましくうと体も嫌った。のめり込んだピアノも強引な練習が祟り指を痛め、音楽大学も直前であきらめた。「音楽教師の免状を欲しい！」と思つた己の不純さも嫌った。

ふと聞いた声―「シヨパンのマズルカは踊れる貴女なら弾ける…」恩師ゆたか＝稲田泰 師の声。
その声に押されて舞踊に舞い戻り、私は「自分探し」の旅をはじめた。

戦前、ドイツの音楽家Ⅱレオニード・クロイツァー（1884-1953）の弟子で、ピアニストを目指していられた稲田泰先生。現在、日本に拡がった合唱コンクールがまさにあのとき始まったのだった。クラス対抗での合唱の練習。私はピアノ伴奏をつとめた。焼け跡の校庭には人々の声が響いた。その時の訓練を受けた幸運な友人たちが全国的に散らばっている現象は素晴らしい！

人と声を合わせた爽快感。それはその後の「水行^{みずぎょう}」の読経、四国巡礼の祈りのチャンティングとも重なる。心と体の結び付き、人々との結び付きの最初の体験であった。

不安感

子供たちを通して二重映しになる自分の小さかったときに幾重にも押し返され、映し出される。自然界の諸々の不思議―。

暖かい太陽、アリンコの姿、土や草の香り…次々とやってくる考え方…安心、ムラムラする不安。

常に何かと結び合っていた！という欲求がありながら、肉親の誰とも結ばれていないことを、白々しい感覚で感じていたことなど…その苛立ちに似た感覚を誤魔化せなかった。

戦争、戦後の月日が過ぎ、更に人生への疑問と恐怖。周期的に脅かされる魔物のようなヴァイオレンスには抗しようがなかった。

若いときの焦りと不安感は、今思い出しても身震いがする。その度に、今の若者の行く末を思う――。

時の刻み

誰しも若いときの悩みは苦しい。自分が本当に欲しいものがわからない。その上、それが簡単に手に入らない。先達の残した足跡や周囲の人々の動きから、手立てはいくつもあるのに……迷う。ただいたずらに迷う。それは人目を気にし過ぎ、失敗したくない……という自我意識がのさばるため。勇気も足りず、すぐ諦めやすい。また、人に指示や教授を仰いでも、自我をしつかり捨てないために、中途半端になり実りにくい。

良い指導者が必要。その逆も成り立つ。何を目指すかのきっかけを掴むのは自分。入り口に入るのも自分。励むのも自分。努力し続けるのも自分。一つを選び、まず実行してみる。失敗したらやり直してみる。今、判っても、あの頃にはそれがはっきり判っていない。

実行する力―経験を積むことは、先人も後輩もない。

伸び伸びと自由に生きられたら素敵に違いないのに！

呪文

何も知らないうちに、突然にこの世に送り込まれる人間。日本に生まれた私も人間縮図、社会縮図の最小単位Ⅱ家族で、人の相互関係の愛憎も教えられた。「衣・食・住」の楽しみも安心感も、たつぷりともらった。

私には既に「舞踊」というレールが敷かれており、昭和初期より延々と「舞踊とは何ぞや!？」の呪文。それを引きずって歩いて来た。

無心で踊った時、抵抗、反発、戦後の混乱、止めた十五歳……そして教える力のない十七歳（高校二年）のときに問われるままに引揚者の子供たち十人に、私はダンスを教えた。三百円の月謝十人分…最初の収入でありそれがどんなに大切だったか！嬉しかったか！

当時、食べ物を削ってでも子供たちの情操教育をした大人たちの意識の高さ。

人にとつて「舞踊」はどんな意味を持つか。

「衣・食・住」が絶対的に不足な時代。現在のような稽古ごとがまだ流行ではなかった一時代前の現象だった。そのとき報酬を受けたその重荷と心苦しさは体に残り続けた。それは決して「衣・食・住」には費やさず自分の勉強の費用に―と。また決して途中で舞踊は止めまい！と心の中で私は私に約束した。まるで「呪文」のように。

糸の切れた凧

音楽大学の受験をあきらめた私は、コンサート・ダンサーを志ざし、演出・振付けの自作自演を世に問うことになる。時も時、世は新しい運動の展開期であり、「既成」「規制」に反発して「奇声」を発し「氣勢」を上げる若者たち（実は私も）は現代的であることを求めている。

時も時、やはり多くの大人たちも戦後の一番乗り？ とばかり芸術家たちが協同組合の組織作りに乗り出した。西欧のユニオン・システムの型を参考に。その発表式の会場で、経験も頭も若過ぎる私の鼻は権威的な匂いを嗅いでしまい、すぐさま退散した。従来からの家元制度の現代版。それは協同組織化して社会に公認させようとする動き。「舞踊」を規制されたら困る。「恋愛」も「結婚」も規制されたら困る。

その後は、糸の切れた風同然。**個立**しなれば成り立たない……と考える人がいてもよいと思っていた。

限りなくピンク色

カーキー色一色のあの時代から一気に解放され、若者は限りなくピンク色に染まり、年配者からアプレゲール（戦後派）と呼ばれた。当時の私は、祖母からの倫理観と性解放の落差に悩むティーンエイジャー。

外国の舞踊団も次々と来訪。ニューヨークからのジャズ旋風が最も強烈であり、一気に日本中にナイトクラブが続出。その需要供給に走る人々。社会的秩序作りの協同組合も一気に多発。戦前にヨーロッパから流入した芸術的文化は商業文化に覆くつがえされた。

いつの時代にも起こる因習に反発する繰り返しのドラマは果てしない——この潮流——特に戦後のそれは過激で前衛派（アヴァンギャルド）の名で荒れ狂った。

反社会性の毒の匂い――はかりごと 謀も潜む犯罪性と紙一重。その順応の早さ！次々と形を変えて
国の内外問わず巡りめぐる。

日本のオウム真理教までニューヨークに現れ、かつての統一教会も今になって日夜報道されている。ストリートダンスのブレイキングはオリンピックの目玉商品にもなり、体はマシーン
そのもの！道化も商品の道具になったか…？

建前と本音^{たてまえ}

「常識」は必須、「建前」も必須、「本音」も必須。あきらめないで生きるのも、もつと必須。

「建前」も「本音」も過度に傾くと便宜的な手段の「方便」になり、自我の匂いは消せない。誰にとっても、自分のために生きていて、周囲や社会のためだけに生きているのではない……としたら、他との同意や同調はどうしても二の次になる。

“人に認めてもらいたい！”も欲の匂いが漂う。**“生きる”**ということは、何と難しい流儀だろうか。

DANCE

DANCEはいくつも種類があるが、昭和の初め、近代化の流れの中で母の夢のため三歳でダンスを始めてしまった私は、敗戦の混乱期の只中、十五歳の時「創作コンサート・ダンサー」の道を選んだ。

日本では僅^{わず}か百年足らずの洋舞の歴史であつたが、先人の足跡を追い、リトミック・ノイエタンツ・バレエ（ロシア系）のテクニクを追い、若い身に受け、人並みに踊つてはいたが――。周囲の圧力、社会の規律、それにそぐわない内部の葛藤。未知への不安……人並みに悩む。

ダンス界でのテクニクは、キャラクター的な技術であり、体にとって純粹な意味での技術ではないと思えた。各々の舞踊家や振付師が好みの作品を作り、競い合えば体の使い方が激しく、その癖や歪みも同時に肉体に及ぼす。スパルタ的に練習を重ね、体に覚えさせるような従来からの流れに乗ることは、まして日本人の体を外国のバレエテクニク（ロシア、イタリヤ型）に締め付けるのは私の疑問の一つであり、心も体も痛めつけ失敗率も多いことは周囲で見聞きしていた。

若いとき、心の弾むままに動いたら非常に危険であり、いかなる動きにも堪えられる強い体を欲しい！ と思い込み、合気道やヨーガに目を据えたり、真言のチャンティングにのめり込んだりした。

両性具有

男女双方の特質を強く持ち、遺憾なく發揮させ得る人こそ表現者として資格があり、仕事を成し得る——と、私はそうように信じた。そして我武者羅に自分を鍛えようとした。それは東西のアーティストから教えられた。どちらにしても自分の持ち味だけでは無理であり、仕草だけに終わってしまうであろうから——。

「知」「勇氣」「繊細」「愛」のバランスによって——。

「ジェンダー」と云ってネガティブに騒がれているより、その素質を強く持っている人は自分を磨きやすい——とさえ、私は思う。

脱 皮

ピアノではグレン・グールド(1932-1982)。チェロではヤーノシュ・シュタルケル(1924-2013)にのめり込み、バツハとブリクラシツクの小曲ばかりを数十年に渡り身にまわせて毎日のエクササイズの伴奏曲にした。また「サラバンド」「シャコンヌ」「コラール」を作品にして上演もした。

純白や輝くような色彩の天空的な色彩は、オリエンタルのくすんだ皮膚と体型が昭和初期の私には馴染まない。「夢の膨らみだけでは到底押し切れない…」と、もう一人の私が云う。

私はそのとき、舞踊家を挫折した。自分の舞踊を判つてもいないのに、挫折？

「洋舞」と呼ばれるジャンルからの脱皮。ついでに複雑な「現代芸術舞踊」という意識からも脱皮した。

私にとって大切な舞踊。納得できるまでは挫折はできない。

脱皮し続けよう！

羽が生えて飛べるまでは！

これが「恋」？

今でも忘れられない。

食糧難が少し解決した頃の話。十分に食事をしていないと感じた友人に、少しのパンとバターを買い、そーつと部屋の隅に置いてくれば…と思いついた。しかし、それをためらう。幾日もいく日も考え、パン屋の前でうろうろするが、遂にそれができない。やがて食事時になっても食事をしない自分に気付き「あつ！」これが「恋」？ 苦しかったから多分…「これは…？」と思つたが。

何・と・あ・の・葛・藤・！

数年後にやつと判ったこと。それまでの家族というユニットで身についた習^{なら}わし。何でも分け合った戦後。相互愛が強く、あれは他を思う気持ち。「恋」はもつともつと異なる感情とからだの衝動Ⅱ利己的である。

「恋」と「愛」は似ているようであり、混同も起きる。同じように「芸術^{アート}」と「生活」もすぐに混同する。「恋愛」と「結婚」も非常に難しい。どうにかその両方をかいくぐった！ということが、やつと今判る。四、五十年も経たなければ、それがはつきり解決しない程、人の生き様は難しい。

「恋」は利己的。「愛」は利他的。先人が教えてもいるのに、実行となると至難の技。

日本人

アメリカンフード恐怖症を抱えながら、東西の文化の異なる中で右往左往。風土が異なれば水も気温も違い、石鹸も水も合わず、日本茶が不味^{まず}い。

一ドル 320円～400円！ そんな時代に私はニューヨークに飛び込んだ。一気に視界が広がり、他国の人々の生き様に触れ得た。

すごい！ みごと！ ニューヨークのすごさを一身に浴びた。まさに「井の中の蛙」の諺。幸いにゲストとして優遇され、舞台にも恵まれたが、私は「日本人」。「武士は食わねど高楊枝」的な態度で一年は頑張れたが―。市民権もなくユニオン加盟も不可能。自作品発表の道のは遠い…。やり直しを！ と、日本に舞い戻った。

帰った日本で見たものは、以前よりもっと難しくなっており、「土壌」「排他性」も更に厳しく、一挙に逃げ腰になった私は「フルブライト資金で再渡米しよう！」と方針を180度回転させた。

！
❖ — ❖

人間否定

複雑・過密化した社会の生存競争の波は、いつの時代でも、日本でもアメリカでも闘争の連続であった。一九六〇年はじめ、正統に対する反逆の波は最高潮！「人間否定」「ジャンクもアーツ」「反正統の異常美が従来^{さき}の美を覆す様を全身で浴びた。それが時代の「美の定義」に収まれば、人々は右往左往。そして次の波にまた踊らされた。

ベトナム戦争終結直後の解放はヒステリー症状で、エロチシズムと共に一挙にダンスが大衆のものになった。ダンスエクスプロージョン、パンクロック、エアロビクス、太極拳、ヨーガ、ブレイキング…舞踊家の多くは開店休業。そして“舞台”で生きるという意識が主流になれば、ミニマルアート、ポストモダン、ニューウェイブ、ネクストウェイブのまたネクスト、と目まぐるしい。この順でそっくり日本にも流れた。しかし、日本での主流は、クールな米国と異な

る。ウェットな“舞踏”の萌芽であり、アンダーグラウンド、赤テントに続き三島由紀夫の割腹…。

ブーメラン

一九九六年、再び単身ニューヨークへ！

何故なりと身投げでもないと一歩も進めなかった。まるでブーメラン？

いいえ、気狂い振り子！

吹き抜けたアヴァンギャルド旋風、学生運動、黒人暴動の嵐、ヒッピー族の急増、価値観の
逆転、人間否定！

私の住む処が見つからないのだ！

フルブライト資金

アメリカ国務省Ⅱフルブライト財団は敗戦国に対してであり、日本のアーティスト、学術研究者が選ばれる。往復の旅費、一年間の学費と生活費、語学研修も含まれ手厚いグラントである。

幸運にも再渡米（逆ブーメラン）の私は、その資金を極力切り詰めて自作品ばかり（ソロ、デュエット、トリオ）男女四人の賛助出演を得て、カウフマン・コンサートホール（モダンダンスの常套小屋）でデビュー公演をした。

日本もニューヨークも己を取り囲むすべてに反逆していたのか。舞台の型（プロセシウム）にも納得していなかったからか。

穴ぐらの中、古代の土の中に自分を埋め閉じ込めた。一九六七年、作品「土偶Ⅱ J O M O N」が、この時生まれた。

必然か、偶然か？

作品「土偶Ⅱ J O M O N」

ひょうひょうと風の吹き荒ぶ音。「キーン…」と生木^{なまき}が立ったまま裂ける音が沈黙をきわだたせ、太古の雄たけびがあたりにこだまする。日本の古代遺跡から発掘された、土で作られた焼き物の人型である土偶。原始時代、縄文のプリミティブな大地の生命力を表そうと作品に思いをこめた。生木や闇の音はミュージック・コンクレートⅡ武満徹のものだ。

死者のお供として土偶を使用する以前には、生きながら地下に埋められた人々がいたと言い伝えられ、その人々の泣き叫ぶ声が地表に聴こえたともいわれる。そんな話にも、わたしのイメージは撓^{たぶ}められた。振付け中、矢継ぎ早に動きが決まり作品が出来てしまった。

疑いもなくエネルギーを外側や天空にばら撒く西洋のダンサーに対抗したわたしが、下に下にと降りて行き膝でいざり、伏す、這う、倒れる、そして物体として立つことになった作品である。

一九六九年の五月、ニューヨークで初演したこの作品は、秋には東京の虎ノ門ホールでも上演し、その年の文部省芸術祭奨励賞、舞踊ペンクラブ賞、音楽新聞新人賞を受けた。

あとがき

人々がのびのびと己の欲求や主張を通すニューヨーク。他民族が入り乱れて暮らす特殊な地——ニューヨーク。とても羨ましく思った。現在、民主主義は異なった現れではあるが——。

日本人としての自覚。私にとってこれは確実に欧米のもたらせたもの「武士は喰わねど……」的な、日本人気質も知った。しかしヤセ我慢は、どの国にいても私には無理だった。どうやらもらって来た血は差し引きできないことも知る。

若さの故の怒りのエネルギー。『足跡をたどる』を書いて判った。やっと作品「土偶」三十六歳。なんと歩みの鈍い……。しかし私は鬼のように焦って走った。

う・さ・ぎ・だ・つ・た・。

二〇二三年六月

三条万里子

著 者 三條万里子 さんじょう・まりこ

製作者 さとう かよこ

発 行 二〇二三年六月

足跡をたどる

発行者 Mariko Sanjo Cavior [New York]

<https://marikosanjo.wixsite.com/sanjo>



参考文献 三條万里子著

『イカルスのように』21世紀BOX

TO READ MORE

『よだかの星のように』『鳥』『一人のための
デュエット』『VOICE』『夢は枯野を…』

